

優れた指導 応える産地

J A 営農指導実践全国大会から

J A 全中が2月に開いた「第5回J A 営農指導実践全国大会」では、全国8プロジェクトから選ばれた営農指導員らが農家所得向上に向けた創意工夫ある取り組みを報告した。産地振興や担い手支援につながる、営農指導員の光る活動を紹介する。(8回掲載)

果樹産地のJ A 山形おきたまは、農家の高齢化による出荷量減少が課題となる中、統一共選や出荷施設再編などの園芸事業改革プロジェクトを推し進めた。大改革に異論の声もあったが、農家の利点やJ A の意気込みを丁寧の説明して合意形成。改革後、産地の主力ブドウ「デラウェア」で

柴田 啓人士さん (JA山形おきたま)



農家らに囲まれ、果実の選果基準について説明する柴田さん(山形県南陽市で=J A 山形おきたま提供)

果樹 統一共選で高単価

①

は最優秀賞に選ばれた。プロジェクトは2015年9月に始動。産地の果樹出荷額は10年間で3割落ち込み、老朽化する出荷施設の修繕負担も増し、危機が迫っていた。プロジェクトはその総合対策で、①「おきたま統一共選」実施②出荷施設の再編③J A オリジナルの果実商品開発——の3本柱。事務責任者が発表者でJ A 園芸販売課の柴田啓人士さん(42)だ。柴田さんは、紛糾も予想された各地区の説明会や研修会に必ず出て農家に語り掛けた。出荷基準の説明も手掛け、農家と接する最前線にいた。「産地を強くするという気持ちを農家と共有し、信頼を得ることが大切だった」と強調する。共選ごとの基準を同じにする統一共選は、量を確保し有利販売するのが目的だ。農家自身による統一規

格づくりをバックアップし、17年には主力のブドウ「デラウェア」で開始。この年、J A は市場30社以上と価格交渉し、1キロ650・7円というJ A 合併後の最高単価を記録した。この成功は、他の主力品目の統一共選実施も後押しした。18年に西洋梨、リンゴ、桃の統一共選も始まり、単価は6・26%向上。農家所得に直接結びつく成果となった。プ

出荷施設再編、商品開発も

プロジェクトは集荷場4カ所、選果場2カ所を整理する再編計画を含み、不便となる農家から厳しい声も飛んだ。合意に2年で100回もの丁寧な説明が必要だった。その後、この一環で新設した広域集出荷施設の選果利用料は、従来と同等以下に設定。リンゴは1玉最大5・5円を削減できた。経費を抑えたとした農家への約束を果たせた。プロジェクトでは商品開発にも取り組み「デラウェア」で大手菓子メーカーと連携したグミや豆菓子、有名シェフ監修のアルコールフリー飲料などを発売。土産品などを通し、青果の知名度向上にもつながった。依然進む高齢化など課題はまだある。柴田さんは「出向く営農指導を強化するため職員のリベルアップも大切だ。産地を支えるためにやることは多い」と意気込む。(次回は12日付)